慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伊勢物語眞名本に就いて
Sub Title	The manabon of The Tale of Ise
Author	伊藤, 哲夫(Ito, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1958
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.8, (1958. 10) ,p.46- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00080001-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伊勢物語眞名本に就いて

伊藤哲夫

一

現存する伊勢物語眞名本は、假名本に比して、書寫年代に於て比較的新しく、慶長以前に遡ることが出來ない。（池田龜鑑氏著「伊勢物語に就きての研究」研究篇三六八頁）が、伊勢物語眞名本という名稱が、文獻の上に最初に現われるのは、河海抄からである。河海抄は貞治年間に四辻善成に依つて撰せられた。以後、眞名本の存在は、室町時代を通じては、註釋書の上においてのみ知ることが出來、寛永二十年に至り、初めて版行されている。眞名本の用字についてのまとまつた學問的成果を最初に公にしたのは、今井似閑であり、眞名本を眞正面から批判したのは本居宣長を以つて嚆矢とする。本居宣長の玉勝間（寛政六年―文化九年刊）中に於ける伊勢物語に關する考察は――主に註釋についてであるが――それは量こそ少ないが卓見に滿ちたものである。彼は伊勢物語に就いては非常な興味を持ち、註釋を完成させようという抱負を持ちながら遂に果されず、玉勝間にノート程度でしか示されなかつたのは、彼のみならず我々にとつても殘念なことである。彼の學問は同じ玉勝間中にある「師の說になづまざること」で示されている如く、常に嚴正である。その嚴正な態度で臨んだものが、眞名本に對する批判である。彼は「いせ物語眞名本の事」の中で次の如く述べている。

伊勢物語に、眞名本といふ本あり、萬葉の書キざまにならひて、眞字（マナ）して書たる物也、六條ノ宮ノ御撰と、はじめにあげたれば、

その親王の御しわざかと、見もてゆけば、あらぬ僞にて、後の物也、まづすべての字のあてざま、いとつたなくして、しどけなく正しからず、心得ぬことのみぞ多かる、（中略）かく誤れるは、むげに物かくやうをもわきまへしらぬ、えせものゝしわざと見えて、眞字はすべてとりがたきもの也、然はあれども、詞は、よのつねの假字本とくらべて考ふるに、たがひによきあしきところ有て、かな本のあしきに、此本のよきも、すくなからず、そを思へば、これもむかしの一つの本なりしを、後に眞名には、書キなしたるにぞ有べき、されば今も、一本にはそなふべきもの也、然るにいといと心得ぬことは、わが縣居ノ大人の、此物語を解れたるには、よのつねの假字本をば、今本といひて、ひたふるにわろしとて、此眞名本をしも、古本といひて、こちたくほめて、ことゞ〳〵しくよろしとして用ひ、ともすれば此つたなき眞字を物の證にさへ引れたるは、いかなることにかあらん、さばかり古への假字の事を、つねにいはるゝにも似ず、此本の、さばかり假名のいたくみだれて、よにつたなきなどをも、いかに見られけむ、かへす〳〵こゝろえぬことぞかし、（下略）（岩波文庫本一九四―五頁）

と眞名本の批判のみならず、眞名本を尊重した彼の師、賀茂眞淵の態度をも難じているのである。宣長がかくの如く詞激しく論難しているのは如何なる理由に基づくのであろうか。この事を考察するに先立ち、伊勢物語眞名本が、中世以來どの様に讀まれ――扱われ――てきたかを概觀する必要があるように思われる。

二

河海抄（貞治年間成立）に伊勢物語眞名本の名が最初に現われたことは前述の如くであるが、この事實は南北朝時代には眞名本が成立していたことを意味する。但し、河海抄は源氏物語の注釋書であり、伊勢物語の註釋書に眞名本と見えるのは室町末期である。眞名本がどの様な姿でそれらの註釋書に引用されているか。具體的な例をあげて示すと、

なまめかしく　　寂媚伊勢物語眞名本　　又生日本紀

古今　秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひととき（國文註釋全書本二〇頁）

あて人と見えたり　妙人　高貴人伊勢物語眞名本　おほかたの秋をかなしみみることもあてなる人はしらすそありける　千里（同書四八頁）

右に見られる如く、源氏物語中の語句の解釋にその考證として利用されている。河海抄中に伊勢物語と文字が出て、用例として、或は引歌などとして伊勢物語が引用されている箇所が筆者の調査したところでは百二十一例あり、その中、眞名本と明示して引用されている項目が二十一項目ある。（若干の異同はあるが、「伊勢物語に就きての研究」研究篇二一八頁を參照されたい。）しかし、その二十一例中、例えば、

はしたなきこと　無半事

とある河海抄に對して、現存する眞名本では

いとはしたなくて　最强而

とするが如き相違が、兩者の間には、九例ほど見られるのである。勿論、全般的に渉る大きなる相違というのではなく、池田龜鑑氏の調査では、河海抄が、同じく「强」という字であり、河海抄全體の校合が爲された上で斷定しなければならないことであるが、此のような異同は異本が存在していたという消極的な證明にはなると思う。とまれ、伊勢物語眞名本が、日本紀、萬葉集、遊仙窟等の書物と同様に、語句の考證上の用例として利用されていたということは、眞名本がその時代にあつては、相當に古本として價値重く見られていたということの證明になると思う。

同じ四辻善成の、源氏物語講義の聞書である千鳥抄（至德三年成立）には、千鳥抄全體が河海抄に比して簡略なものなのであるが、眞名本引用の度數は非常に少なくなり、僅に二カ所を數えるのみである。（群書類從本による）

その他、池田龜鑑氏の調査に依ると、天文十二年書寫伊勢物語聞書にも眞名本の名が見える由であるが、筆者は未だその調査の機會が無い。

更に、中院通勝の岷江入楚（慶長三年成立）には十二例ほど引用されている。

海つら　海頭伊勢物語眞名本（國文註釋全書本）というように、河海抄同様な様式で擧げられている。岷江入楚は花鳥餘情、河海抄その他の說を集成し、自說を述べた註釋であり、書中河海抄の引用多く、眞名本の場合も、十二例中八例は、河海抄からの引用であることを註記してあり、果して、中院通勝が直接に眞名本を見たかどうかは疑わしいのである。かくの如く、室町時代に於ては、眞名本は、我々が推測出來るのは僅か一部の人の間ではあるが、古本として信賴されていた俤を見出すことが出來るのであり、積極的に否定はされていない。

近世に入つては、眞名本の註釋史上に現われる頻度數は加速度的に增えて來る。その原因の一つとして、寬永二〇年（一六四三）に眞名本が整版として刊行されたことが大きな力になつていることは否めない。近世は版本が刊行されることによつて、註釋は量質ともに飛躍する。

北村秀吟の拾穗抄（延寶八年刊）に

六條ノ宮の眞名（マナ）の伊勢物語とて、此物がたりを眞名に書て、かなの點を付られたり。是後中書王（のちのちうしよわう）具平親王のと云傳へり。（國文學註釋叢本）

とあるように、何時の頃からか六條宮が作者に擬せられ、版本には六條宮御撰と誌されている。和田切臨の伊勢物語集註（慶安五年刊）や淺井了意の伊勢物語抒海（承應三年成立）は直接調べる機會は未だないが、伊勢物語眞名本の名が見え、且、六條宮の作であることが誌されている。（「伊勢物語に就きての研究」研究篇三七三―四頁）

拾穗抄にも又、

まめおとこ　眞名伊勢物語に歛夫（マメオトコ）と書。（下略）

というように六例ほど引用してあるが、注目すべきことは、

師此御說は、眞名伊勢物語に、「其乎穗（ソレヲホ）ニ（ニハ）者不有（アラズ）」とあるによくかなふべし（下略）

と、師說、卽ち松永貞德の說が擧げてあり、之によつて松永貞德も眞名本を見た――貞德は承應二年（一六五三）に歿しているので版

本は見ていないわけである――ということが判り、又

師眞名伊勢物語には、「不絕レ櫻」とあり、其故にこりてよみて、もとより櫻のなかりせばと云う說あり、當流不レ用。有ニ口訣。

という如く、貞德以外にも眞名本を使用して註釋していた訣であり、且又、多數の人に讀まれていたということも想像出來る。しかも在來の註釋書の如く、伊勢物語眞名本によつて源氏物語を解釋しているのではなく、例えほんの一部ではあるが眞名本の本文によつて、伊勢物語を解釋し、鑑賞しようとする態度の伺えることである。

契沖は勢語臆斷（享保二年刊）に於て、伊勢物語本文の校合に

マナ本ナシ。マナ三字ナシ。還來而マナ

という樣に眞名本を用いている。本文の校合以外に契沖の眞名本に對する見解は見られないが、異本として校合に用いたのは、やはり眞名本を重視していたものとみて良かろう。

契沖の弟子、今井似閑に依つて眞名本は一層重要視されたと言つて良い。彼は萬葉緯（享保二年成立）の十三卷に眞名伊勢物語を入れている。そしてそれに師の契沖の說の他に種々の書入れを行なつている。萬葉緯はもともと萬葉集を解く爲の資料を集めたものであり、眞名本もその爲のものであつた。彼は眞名本の用字法については非常な疑問を持つていたらしく、和名抄、日本紀その他數多くの文獻を引き、考證しているのは注目すべきことと思う。伊勢物語眞名本を讀む人は、その用字法の特異なことに先ず疑問を挿し挾むに相違ないが、今迄は僅に、拾穗抄に見られるのみであつたが、積極的に眞名本の正しさを立證しようとして種々の考證を行なつた最初の人として――勿論文獻に現われた上での事であるが――その努力を買わなければなるまい。しかし、その樣な努力にも拘らず、「不詳」と書き、「……誤乎」とし、或は、佺・拌・鷲尾等の如く、語を摘出したのみにとどまつて考證をしていないもの、否、考證出來なかつた文字が數多くある。しかるに、眞名本そのものに就いて伺らの批判を下していないのは、眞名本の正當さを認めようとした爲であろうか。（又、契沖門下で似閑と共に双璧と稱せられた海北若沖の編纂した和訓類林に伊勢物語眞名本の用いられていることを附記しておく。）

一方ではこの様に眞名本の上に多くの疑問を殘しながらも、他方では荷田春滿によつて、眞名本は更に尊重された。今までの註釋書が拾穗抄の數例を除いては、語句の考證の一端を擔うに過ぎなかつたが、伊勢物語童子問（享保年間成立）に至つては積極的に全篇に渉つて眞名本を用いている。即ち、彼は定家以來の歌學者の說を排し、自說を主張するに當つて眞名本を使用しているのである。

（上略）眞名伊勢物語には人柄者心高貴成事手好而異人爾毛不似とあれば、心うつくしうあてはかなることをこのみてとは少よみかたし。眞名につきて、人柄は心高くあてなる事を好みて、こと人に似すとよみてよかるへし、（中略）本は眞名伊勢物語の文字につきてみるへきなり（全集第一卷一〇〇頁）

更にそれのみならず

可レ嘆は此眞名伊勢物語也、可レ稱は此眞名伊勢物語、可レ證も此六條宮の撰也。假名つかひ二三の字なかひあれ共、中古已來の歌書に、眞名伊勢物語ほど假名の正しきは無し、よく萬葉集を見給へる撰なるへし（全集第一卷一五〇頁）

と稱揚しているのである。しかし、これは春滿が、定家が書いた流布本や天福本を用いている歌學者――換言すれば定家――を否定せんが爲の所產であり、闕疑抄（慶長二年刊）に反對する手段として、今まで未開拓であつた眞名本を採り上げたと思われるのである。反對の爲の反對の感がないでもない。

彼のこの樣な態度は晩年の弟子である賀茂眞淵によつて受け繼がれ、伊勢物語古意（寛政五年刊）となつて現われた。古意を失わないようにという意味で名附けたに相應しく眞名本を基として記している。

是に古本有て、眞字にて書たり、其文字の用ひざま萬葉集をおもひ、專らは新撰萬葉によりて、それより戲れたる書ざまながら、いにしへをしれる人の筆にて、文もとゝのひ義も明らけし、さらば初めに眞字に書りとも云べけれど、字を用ひたる樣さのみにてはえよみ得まじき所も侍れば、其初めは假名也けんを、此物語いでき幾ほどもなく字は植たるなるべし。仍て文の正しき也、さて今ある五百年こなたの文に對へ見るに、今の本はいと字のみだれたるを、よくも他を見くらべずして書傳てや有けん、ことわりなき所多し、故にあづま磨呂の大人も古本を用ゐられたり。今も其を專らとして解て、たま〳〵今本をばとれり（全集、第四卷三四四二頁）

と語調は春滿と違つて比較的穏やかである。童子問も古意も共に劍見・卓見にあふれ、註釋書としては、伊勢物語中屈指のものである。その兩者によつて光を浴びた眞名本も宣長によつて嚴しく批判されたのである。春滿・眞淵も眞名本の缺點は或程度了承して居たのであり、春滿の場合はともかくとして、眞淵までもがその批判の目を曇らせたということは、宣長のみならず、我々も「いかなることとならん、かへす〳〵心得ぬ事」である。

宣長によつて批判された眞名本は、「されば今も、一本には備ふべきものなり」という詞の如く、以後は專ら校合用に用いられ、藤井高尙の伊勢物語新講（文政元年刊）や齋藤彦麿の勢語圖說抄（天保十年刊）等に眞名本を引用する一方、常に批判的であつたことも忘れてはならない。勿論現在に於ても眞名本を古本と認める一方やはり一異本たるの域を出す眞名本に關する論考の少ないのも事實である。

三

今更こゝに說くまでもないが、眞名本と稱するものは、平家物語眞名本・伊勢物語眞名本と稱する如く、假名本の存在する一方に於て、全て漢字を用いて書かれた書物を指すのであつて、總て漢字で書いてあるから、それが眞名本というのではない。眞名本はかくの如く、表記に全部（一部分假名の混入している部分もないではない。例えば平家物語中の和歌の如き）漢字を用いているが、そこには自ら二つに劃然と分類されるものがある。その一つは漢文――又は漢文に類したもの――であり、他の一つは萬葉假名風のものである。眞淵が新撰萬葉を繼いで書いたと言い、宣長が萬葉の書きざまにならいと言つている如く、伊勢物語眞名本は萬葉假名系統に屬するものであり、漢文系統が、熱田本平家物語、曾我物語、方丈記等比較的多く存するのに對し、萬葉假名系統は伊勢物語が一本であり、その點に於いても貴重な書と云つて良いであろう。宣長の「玉勝間一」に於ける批判に耳を傾けながら眞名本の姿について觸れてみたい。開卷第一に氣のつくことはその用字法である。漢字の知識に大分疎くなつている現代人の眼が奇異と感ずるのみならず、今井似

閑の頃より問題としていたことは先に紹介した如くである。

まづすべての字のあてざま、いとつたなくして、しどけなく正しからず、心得ぬ事のみぞ多かる。そが中に、闇うを苦勞、指之血を及後などやうに書けるは、たはぶれ書キにて、萬葉にもさるたぐひ有り。

眞の意味の戯書ではないが、非常に借訓の例の多いのは事實である。更に尻馬に乘つて例を擧げるならば、

賴むを手飲、身をえうなきものにを身乎衞府無物、かれいひを何怜、してのたおさを死代之田亭、とする如きである。

更に續けて言う。

又東を熱間、云云にけりを逃利なと書るも清濁こそたがへれ、猶ゆるさるべきを、なんという辭に、何ノ字を用ひ、ぞに社、とに諾ノ字を用ひるたぐひいと心得ず、然のみならず、思へるを惠流、給へを給江、又ここへかしこへをも、みな江と書き、身をも、これをやなどの、をもをやと云ふ辭を、面親と書きキ忘を者擢と書るなど、これらの假名は、今の世とても、歌讀む程の者などはをさをさ誤る事無きだに、斯く誤れるは、むげに物書くやうをもわきまへ知らぬ、えせ者のしわざと見えて、眞字はすべてとり難きものなり。

と、その假名遣いを批判している。筆者も非常にこの假名遣いには疑問を持つている。文字の當て樣の下手ですつきりしないのは認めるが、全くこの作者は文字の使い樣を知らなかつた人なのであろうか。眞名本を辯護する積りはないが、もう一度、この樣な表記法を考え直してみる必要があるのではないか。この樣な點にも眞名本成立の秘密が潜んでいると思われるのである。例えば、何を「なん」にあてるのは漢文の訓讀には常に用いられているものである。又、給へを給えと語尾を發音通りに書く表記法であるが、果して之は書き方を知らざるえせ者のしわざなのであろうか。鎌倉中期を下らざるべしという時賴本伊勢物語は、ミヤツカエスル。キクノハナノウツロエル、アツマエ（點は筆者）とある。眞名本と時賴本の關係は未調査であるが、へをエと表記するのは眞名本の作者一人のみではない。臆斷を下すならば、眞名本に於ては、文字は用字でなく表記の爲のものなのであり、音をそのまま寫すという傾向があつたのではないか。この考えはあまりにも眞名本を正當化しようとする意識があるが、尙、研究してみたい。このことは、又、眞名本の成立時期をも暗示していると思われる。

次に熟字の問題であるが、眞名本の最も特色がある點である。參考に四段を全部掲載してみる。

昔東五條爾皇太后宮御坐計留西對爾住人在計利其乎穗爾者不有志深有計留人往詢計留乎親月上旬計爾外爾隱逃利在所雖聞他往可通所爾毛不有計禮者名乎侘與思乍何在計留復年大蔟爾前梅榮成爾去季乎思出而彼西對爾往而立而見出雖見去年爾可似毛不有打泣而亭有板敷爾月頃左右手伏而去年乎慕而讀

月哉不有春哉昔春不有吾身獨本身爾爲而諾讀而夜若旦與明爾泣哭還逃利

この短い段の中にも、月の名を親月、大蔟（むつき）と書き、傾左右手（かたぶくまで）、亭を（あはら）、若旦（ほのぼの）をほのぼのと讀ませている。更に他の例を擧げると

陰精・恒娥・明玉・夜景（つき）玉塵・六出・（ゆき）花洛・京師・花城・王城（きよう）後宮・掖庭（ささき）漢河・天河（あまのがは）念（ヤヒ）記、信（かたみ）五更（さよふけて）絡石鷄冠木（つたかえて）、努・勤（ゆめ夢）

しかし、之等はもと漢語としてそれぞれ熟字であつたことが言い得ることである。例えば

亭（あばら）は倭名抄に和名阿波良とあり、それぞれ古辭書類を見れば考證し得るのである。この作者は明らかに、確かな出典に基づいているのである。この故に、春滿・眞淵も信用したのであろうか、以下若干の例を參考に供する。

葬（はふり）死覆レ棺也。皮不利帷也（新撰字鏡）

偸兒（ぬすひと）和名奴須比止（和名抄）ヌスヒト（名義抄）

鄙（いなか）ヰナカ（名義抄）

倨子（わらはへ）ワラハヘ（名義抄）和良波倍（和名抄）

斂夫（まめおこと）斂色マメタツ（遊仙窟）でマメオトコと讀ませるか。

上（たてまつる）タテマツル（色葉字類抄）

天河（あまのかは）和名阿萬之加八（和名抄）

好色（いろこのみ）イロコノミ（色葉字類抄）
忍（くづれ）クツス（名義抄）
貝（かたち）カタチ（名義抄）
謝（あやしう）アヤシフ（名義抄）
左右手（まで）泉郎（あま）萬葉集
信（かたみ）信（かたみ）白氏文集（河海抄より引用）

辭書類のみならず平安から鎌倉にかけての、中國・日本の註釋をも調べる必要があるわけである。右の他に、極立つて多いのは義訓である。

若旦（ほのぼの）五更（さよふけて）雲集（あつまる）金露（しらつゆ）出入（すだく）鄭重（ねんごろ）高貴（あて）日沒（いりあひ）黄昏（いぬのとき）云殘（いひさす）簡略（いささか）惠澤（つゆ）三更（よふかく）入風所道（ほのかに）

右はその若干例を示したのであるが、非常に義訓が多いということは、眞名本成立の上にやはり重要な意味を藏していると思う。

しかし、すべての字が、考證出來、或は考證出來得る餘地があるというわけではなく、意味不明のものや、明らかに誤りと認められるものがあるということを認めるのに吝ではない。綯裳（ひしきも）恐（さがなき）佺（さりければ）等は、現在考證の手懸りが無く又、筌箒（かたみ）は笞青漢語抄云賀太美の誤りか。

以上の如き内容を有する眞名本伊勢物語はやはり、その成立當時の曖昧さを認めないわけにはいかない。そして江戸時代以來の學者の說いている如く、先ず假名本の存在を考えざるを得ない。その内容に至つてはいよ〳〵當惑せざるを得ないものがある。しからば何故この樣な眞名本が成立したのか、こゝに我々は考えを向けなければいけない。

四

伊勢物語のみならず、他の眞名本の成立というものは非常に複雜である。熱田本平家物語は假名本と内容の一致する點が多いという。その點伊勢物語と同樣である。又、曾我物語は眞名本から假名本が出來たと推定される。更に善光寺の緣起に於ては、假名本があり、次いで佛典でそれを補説しながら量を增し眞名本が出來、更にその眞名本から假名本が作られるという徑路をとつたらしい。伊勢物語は、現存の諸本よりしては、眞名本の成立を假名本より先に置くことは出來ない。河海抄に引用されてあることによつて眞名本成立の下限を南北朝時代に引く事は出來る。六條宮御撰ということを頭から信用すれば、六條宮は村上天皇第七皇子二品中務具平親王で歿年は寛弘六年であるから、その上限は平安時代ということになる。しかし、平安末期より鎌倉初期に亙る文獻に伊勢物語眞名本に關する語は見當らず、この事は、當時眞名本が成立していなかつたという積極的な證據と解釋されるという池田博士の説に從いたく、その成立の上限は鎌倉時代ということになる。殊に、伊勢と書くべきを妹背と書いてイセと讀ませている如き、輕々しくは言えないが、後代的なものと言い得るのではないか。

漢文から假名に移り變る卽ち難から易へということに邇行して、成立した眞名本は如何なる條件、要求のもとに生れて來たのであろうか。またいかなる讀書に依つて讀まれ、もてはやされたのであろうか。既に繰り返せる如く、眞名本の成立こそ最も興味深き問題なのである。ある人は言う、伊勢物語を眞名で書きたるは重々しく權威づけん爲のものであると。室町時代の註釋の特色は漢籍や萬葉集、日本紀等を引用して、その出典を求め、自説に當てはめようとした傾向があつた。慶應義塾圖書館藏伊勢物語註は室町時代の寫本で、肖聞抄等に古註として引用されているものとその内容を一にする註釋書であるが、そこには漢書・史記・文選・文集・孝經・萬葉集・日本紀・その他實に引用文獻はおびただしく、一語一語にそれらの文獻に出典を求め、牽强附會な説を吐いている中世の註釋の一つの典型的なものである。しかし、只單にそれが中世の特徵であると看過してしまうことが出來るであろうか。

こゝでもう一度、眞名本の文獻に現われた歴史的事實を考えてみたい。河海抄に引かれた眞名伊勢物語は、日本紀・萬葉・遊仙窟などと共に、源氏物語の語句の解釋の一手段に過ぎなかつた。

かくしつゝ　乍（ツヽ）伊勢物語眞名本　（國文註釋全書本一五頁）

ということはどういうことを意味するか。「つゝ」という語のかはりに「乍」を置き換えることによつて文意が明瞭になるということである。それが解というものであろう。近世も相當下つて、安永三年に菊地春林撰古今集眞名字解が版行されている。その跋は次の如くである。

（上略）程ちかきわらはへの、あさなゆふな、なれしが、あるひ來りて、此しふを、よみならへるに、をんな文字は、やすきに似て、あまさかる、ひなの人の舌たみたるは、おのつから言たかひのこともあるにや、あるは言葉ほしくして、こゝろのひとしからさるもの、なきにしもあらす、されは、かたはらに、をのこ文字を書てむやと、わらはの、のそみしかと、大江山いく野の道のふみみぬ身にしあれは、とかくいなみけれとも、此わらはのこゝろにきゝもわかす、せちにもとめしまゝ、しくれふりおけるそと見し、まんえふしふの眞名をはしめ、あるは舊記にあるところの文字を、かれこれ拾ひて、もしほ草のかきあつめたるは、いとをこかましけれと、よしやとてまかせぬ、此中にあけ用ゆる文字は日本紀、續日本紀、三代文德の實錄、あるは萬葉集、新撰萬葉集、古事記、古語拾遺、拾芥抄、江次第をはしめ、または文選、白氏文集、遊仙窟、史記これらの文字を用ひて、いさゝかも愚案の文字をあくることなし、たゝ、文字の上にかへるも、かへらさるも、返は舊記にのせたるを其まゝに用ひて書たり、もとより、ひろくまなひ、しけくきゝけむ人の、見るへきにあらす、たゝ、わらはの讀やすき便あらんこゝろにて、いさゝか其文字にて、其こゝろをさとし安からしめんとて、安積の沼の淺はかなるを、かつみる人のうしろゆひに、忍まるゝ事しかり

とあり、童蒙の爲に、假名は讀みにくいので眞名で書いたとしている。又、讀み易いというだけでなく、そのこゝろ、卽ち語意であろう、それをも示しているわけである。しかも、列記してある書物より字を求め、愚案の文字を擧ぐることなし、としているのにも注目しなければいけない。

五條後宮之西對丹往希留人耳本意丹者非言謁亘希留雄睦月旬餘丹名牟外邊隱耳希留在所者雖聽敢不言謁昱之年之春梅之花盛丹月之可
膦生加利希留夜去年雄戀而彼西對丹往而月之斜左右扶疎成板敷丹臥而詠留　　在原業平朝臣
月矢非奴春矢昔之春非奴吾身壹者古之身爾爲（片假名がふつてあるが今は除いた）

右を前掲の伊勢物語第四段と比較していたゞきたい。江戸時代の童蒙が果してこれを讀んで、古今集を理解したかどうかは疑わしい。しかし、片假名があると更に判り易くなるのは事實である。この眞字解に大きな意味のあるのを看過してはならない。おんな文字では讀み憎くゝ、男文字なら讀み易く、しかも作者は作爲をして、意を通じ易くしようとしている。現在、我々の間に於ても、平假名より、或は音聲より、漢字で示されると、その意味内容が適確に、しかも迅速に理解されることが多いというのは誰しも經驗のあることゝ思う。書物の普及していない鎌倉時代に、伊勢物語を讀んだのは、決して童蒙の樣な者達ではない筈である。殿上人か、宮廷に關係あるものか、或はそれに近い、中流以上の階級の人々であつた筈である。女性は、しばらく問題外として、男子にとつて、歌以外の教養は多くは漢文で書かれたものが占めていたであろうと思われる。公文書はもとより、私的な日記でさえ漢文で書かれている。いわば彼等にとつては、漢文は日常語、或はそれに近い性質のものであつた筈である。日本の小説よりは、外國の文學、思想の方が彼等にとつては常識であつたと思われる。我々が眞名本伊勢物語の用字について、考證している文字は、彼等にとつては、さして奇異に映らなかつたのではないか。こゝに眞名本成立の原因も考えられるのではなかろうか。江戸では眞名字解であるか、古今集眞名本でも良いわけである。又、安永九年刊の賀茂秀隆（鷹）撰伊勢物語傍註は「唯かんなにてはわきかたき所々に傍註或首書をくはへ」ている。

「ほいには」には、ほいの横に本意と書き、「ふせりて」には臥を傍書し、「あばら」に對しては、和名抄　亭　阿波良と頭書している。

非常に簡單なものであるが、更に詳しく註すれば、伊勢物語眞字解に近いものが出來るわけである。更に考えるべきは、義訓が多いということである。義に「いみ」「わけ」という意があるなどと說くも愚ろかなことであろう。更に「給へ」を「給え」と書くのは、その讀み方まで示しているのではないかとも考えられる。この樣に考えてくると眞名本は作成當時には眞字解であつたと思われる。以上

は未だ確たる證據を示す段階に至らず思い附きだけに終つているのは殘念であるが、眞名本生成の一因がこういうところにも潜んでいるのではないかということを指摘する點にとどめる。

五

眞名本は伊勢物語眞名本のみならず、眞名本全體を考察しなければならない。そして眞名本というもの全體に對して考える時は「眞名本の背後」を考えるべきだと池上禎造氏は指摘された（國語國文二十三年七月號）。私のみならず、眞名本を繙けば、一體、何故、假名書きに逆行して眞名で書かなければならなかつたのだろうかという疑問が最初に浮かんで來るに違いない。伊勢物語は特定の人に讀まれたのではなく、各時代を通じて讀まれ、又その階級も上下に幅があつた。眞名本はその中の或る特殊なグループの間から發生し、そして讀まれたに違いない。そして、註釋史を通じて我々が考えられることは極めて漠然としたものに過ぎない。しかし、眞名本研究の方向は――或はそれは全くの見當違いではあるかも知れないが――を示すことは出來たと思う。更に眞名本に用いられている用字――山田俊雄氏は表記といつておられる――を研究することによつて、その背後を究明したいと思う。（昭和三十三年八月）

參考文献

池田龜鑑著「伊勢物語に就きての研究」
池上禎造著「眞名本の背後」國語國文昭和二十三年七月號
山田俊雄著「眞名本の意義」國語と國文學昭和三十二年十月號